

氏名(本籍)	卯城祐司(茨城県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第2317号		
学位授与年月日	平成19年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Schema Modification Processes of Japanese EFL Readers (日本人学習者の英文読解におけるスキーマ修正過程)		

主査	筑波大学教授	文学博士	藤原保明
副査	筑波大学教授	Ph.D.(言語学)	岡崎敏雄
副査	筑波大学教授	文学博士	廣瀬幸生
副査	筑波大学准教授	Ed.D.(教育学)	平井明代
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	茂呂雄二

論文の内容の要旨

本論文の目的は、日本人英語学習者が読解中にどのような過程でスキーマの修正を行うかについて、主として「柔軟性」という観点から明らかにすることにある。具体的には、日本語、英語というテキスト言語の相違、英文の読解熟達度の相違、および、ワーキングメモリ(WM)の容量の相違が読み手のスキーマの修正過程にどのような影響を与えるかについて探ることが焦点となる。なお、スキーマは「学習者が過去の経験によって獲得した社会的・文化的な事柄についてのさまざまな知識の構造」と定義されている。

本論文は、9章から成る本文、参考文献、および付録によって構成されている。

序章では、この論文の目的、構成、および各章の概要が示されている。

第2章では、「スキーマ」という概念の定義と分類がなされ、ついでスキーマ理論の成立と発達に係る膨大な先行研究が批判的に精査されている。著者は、スキーマ理論の問題点や批判はKintsch(1988, 1998)の「構築-統合モデル」(Construction-Integration Model)、および「スキーマ変更」(Schema Change)という概念を組み込んだCook(1994)の枠組みを援用すれば解消できると判断し、スキーマ理論を活用して日本人学習者の英文読解中のスキーマ修正過程を説明するという方針を示す。

第3章では、本論文において最も重要な二つの実験のうち、実験1が詳述されている。最初に、仮説1「英文の読解、WMの容量、未知語の推測のいずれかに長けた読み手は、そうではない読み手よりスキーマ修正テストにおいて高い得点を獲得する」、および、仮説2「英文の読解力が高い読み手は、そうではない読み手よりスキーマを柔軟に修正する」を設定し、実験結果の分析と考察の指針とする。最初に、日本人大学生160名を対象に英文の読解熟達度、WMの容量、および未知語の推測力を測るテストを実施し、その結果に基づき、被験者を3つの群に分ける。ついで、スキーマ修正テストを実施する。

第4章では、実験1の結果の分析と考察がなされ、WMの容量と未知語の推測力はスキーマ修正に有意な影響を及ぼさないが、読解熟達度はスキーマ修正に何らかの相関があることから、仮説1は部分的に支持されたこと、および、読解熟達度の上位群は下位群よりスキーマ修正が柔軟に行えることから、仮説2は全面

的に支持されたことを指摘する。

第5章では、スキーマを活性化できなかった原因の所在を明らかにするために、日本語と英語のスキーマ修正テストを行う。実験に先立ち、仮説3「日本語の文章を読んだ場合、英文の読解熟達度の高い場合、あるいはWMの容量の大きい場合、読み手は、そうではない読み手よりも早く正しいスキーマに到達する」、および、仮説4「日本語の文章を読んだ場合、英文の読解熟達度の高い場合、あるいはWMの容量の大きい場合、読み手は、そうではない読み手よりも多くのスキーマを保持する」を設定する。132名の大学生を対象に、英文の読解熟達度、WMの容量、ガーデンパス文の反応時間、スキーマ修正を要する文章の読解時間を測定するテストを実施する。

第6章から第8章にかけて、実験2の結果の分析と考察がなされている。まず、第6章では、読解熟達度とガーデンパス文の反応時間、スキーマ修正テストにおける読解時間、および、WMの容量との関係を中心に分析し、読解熟達度はWMの容量よりもスキーマ修正の反応時間に強い影響を及ぼしたこと、および、読解熟達度の上位群は下位群より速く文を処理するが、ガーデンパス文ではWMの容量の大きい読み手は小さい読み手より反応時間が長かったという結果を明らかにし、その原因について考察する。

第7章では、「正しいスキーマにいつたどり着くか」、「スキーマをいくつ保有して読み進めていくか」という2点に焦点を当てて定量的分析がなされ、スキーマ修正テストを日本語で読んだ群は、英語で読んだ群より速く正しいスキーマにたどり着く傾向があり、読解中のスキーマの保有数についても同様の傾向が確認されるという結果を示し、ついで、その原因について考察がなされている。

第8章では、読み手がどのようなスキーマを経由すると正しいスキーマに到達するのかについて定性的な分析を行い、日本語の読み手と英語の読み手では、スキーマの活性化の仕方や文の読解中のスキーマの保有方法や数に違いが認められるという結果を明らかにし、これらの結果について、さまざまな観点から考察している。

第9章は本論文の結論である。2つの実験に先立ち設定された4つの仮説について、仮説1, 3, 4は一部が支持されたのに対して、仮説2は全面的に支持されたことを確認する。仮説の検証以外に得られた結果のうち、英文の読解熟達度が高い群は低い群よりスキーマ修正テストとガーデンパス文の反応時間が速いが、WMについては、容量の大きい読み手の方が小さい読み手よりガーデンパス文の反応時間が遅かったという点が注目される。最後に、長めの文章を用いてWMの負荷を多くする、あるいは、反応時間を測定する文と発話再生用の文の長さを等しくする、などの工夫を凝らして研究を進展させたい旨の課題が述べられている。

巻末の付録には、実験に用いられたテストと実験結果のまとめなどが収録されている。

審査の結果の要旨

英語の教員なら誰もが学習者の読解力向上のために腐心するが、理論と実験に裏打ちされた効果的な方策に到達することはまれである。著者は、過去20年以上にわたる英語教員としての実践経験に加え、心理学と英語教育学の両分野で研鑽を積んだ結果、スキーマ理論は英文の読解過程の解明に寄与し得ると確信するに至り、日本人英語学習者のスキーマ修正過程について実験を重ね、結果の分析と考察を深化させ、論文を完成した。

スキーマ理論の起源はBartlett (1932) までさかのぼるが、著者はそれ以降の膨大な先行研究を精査し、理論的発達の軌跡をたどりながら、問題点の所在を徹底的に洗い出すことから出発した。著者は、スキーマ理論を核にして、Cook (1994) の「スキーマ変更」という概念と枠組みを援用し、日本人英語学習者の英文読解におけるスキーマ修正過程を、手堅い実験的手法により、定量的かつ定性的に分析し、考察を行い、興

味深い事実の発掘と意義深い種々の知見を提示することに成功している。

スキーマという、学習者が習得した社会的、文化的知識構造の存在は早くから知られているが、言語を学習するという実際の場での具体的な認知活動とこの概念との関連については、これまで十分に解明されてきたわけではない。その意味において、日本人学習者の英文読解におけるスキーマ修正過程に関する今回の詳細な研究成果は、従来の研究の不足を補うのみならず、今後の研究に対して大きな指針を与えるものであり、高く評価できる。具体的には、たとえば、実験1において、英文の読解熟達度の高い学習者が柔軟にスキーマ修正を行う過程や、読解力の低い学習者がスキーマ修正に失敗する過程を、WMの容量と未知語の推測力という他の認知機構と関連づけて解明していることは注目に値する。さらに、実験2は日本語と英語の両方からスキーマ修正過程を解明しようとしたもので、独創的であり、結果にも大きな意義がある。さらに、いずれの実験やテストについても、周到的な配慮がなされていて、分析と考察の結果の信頼度を高めるものとなっている。

しかしながら、本論文が英語教育学の分野、とりわけ読解力向上のための具体的な方策に資するためには、実験にさらなる工夫と改良をこらす必要があるだろう。たとえば、英文の読解熟達度以外のテストをすべて日本語のみで実施し、英語で実施した結果と比較すれば、興味深い知見が得られるであろう。スキーマについては、定義によれば、学習者に内在する抽象的な概念であるが、本論文で言及され、適用されているスキーマは、提示された英文を解釈する際に示される学習者の判断そのものであることから、より厳密な規定が望まれる。一方、種々のテストに用いられる英文については、たとえば、2番目以降の文は新情報が一つずつ含まれる話題文 (topic sentence) とし、文章全体が一つの主題 (theme) を形成するように作成すれば、スキーマ変更に係る情報などが捉え易くなるものと思われる。また、スキーマやWMなどの説明に用いられる例についても工夫が望まれる。

よって、著者は博士 (言語学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。